
ノアズアークの恩返し

おもち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノアズアークの恩返し

【Nコード】

N67410

【作者名】

おもち

【あらすじ】

コクーン of 事件の後、ノアズアークは自らの電源を切った。しかし、電源は切れきれていなかった。あの事件のお詫びに、再び新一たちを招いたノアズアーク。今度はホームズ・新一ら探偵vsルパン・怪盗キッド！ 警察も異例のタッグを組む！ だが、ノアズアークよりも前に、コクーンに手を入れる謎の影があった・・・。

設定は「銃声がおわるまで」の続編です。

新蘭平和快青＋志保＋探が基本な感じですが、新一と志保のタッグも考えています！

ブローグ

「これ、なんだろう？」

何も知らない男がマウスを動かした。

「なにかのプログラムかな？」

電源を入れますか？

はい いいえ

「はい・・・。」

「な、なんだ！？」

「わが名は、ノアズアーク。わが名は、ノアズアーク。」

「ノ、ノアズアーク？ 何だろう？ まさか？」

「わが名は……。」

ピッ

「なんだ？」

そこに、ノアの方舟の出港の映像が流れた。

「Thank you? いたい……。」

画面はまた元に戻った。

「いったいあれは何だったんだ？ 会社のかな？」

何も知らない男は、頭をかしげた。

招待状

「工藤優作様、Mr・Kudo、工藤優作先生・・・全部父さんあてだ。チエツ。」

「いいんじゃない？　どこかの自信満々な高校生と違って、分別があるから。」

「分別あるかあ？」

「まあまあ新一。いつものことじゃろう？　優作君たちに送ってあげんか？」

「わかってるって・・・これ母さん宛だ。工藤優作様、工藤新一様！　おおお！　工藤先生、工藤優作先生・・・はあ・・・。」

ある休日の夕方。

用事がある蘭に夕食を作ってもらうわけにもいかず、かといって自分で作る気にもなれず。

で、博士や志保のところに転がり込んで、手紙の整理をしていた。

「工藤優作様、Mr・Kudo・・・Mr・Kudo・・・工藤優作様　有希子様　新一様！？」

「なによ。なにかあったの？　今忙しいんだけど！」

「宮野。これどう思っ？」

「あなたたち家族への手紙ってとこね。開けてみたら？」

工藤新一君へ

宛名は3人分だけど、君は一人暮らしだろうから、君の分だけ入れておきます。御両親や他の人の分もしっかり送ってあるから安心して。

久しぶりだね。僕はノアズアーク。

あの後、自分じゃ電源を切れきれなくて、完璧に消えることができなかったんだ。だから僕はまたコクーンに関わることができたんだ。

今度はもっと楽しんでもらえるように、いくつか変更したんだ。また「オールドタイムロンドン」に遊びに来てくれないかな？

君のお友達も大勢呼んだから、ぜひ来てほしい。今回は永遠のライバルを登場させて、君たちにも楽しんでもらうつもりなんだ。

招待状を同封しておきます。詳しいことはそちらにて。

ノアズアークことサワダヒロキ

「あーら、偶然ね。わたしたちのところにも来たわ。」

志保と博士がカウンターの向こうから笑っていた。

「楽しくなりそうね。」

コクーンの中に

「これがあの有名なコクーンか。」

「めっちゃすごいやん!」

「探偵対怪盗か・・・ふふつ。」

「楽しみですね。」

「ぜってー捕まんねえもん。あの怪盗アルセーヌルパンが味方だぜ
!」

「こっちはあのシャーロックホームズがいるんだ!」

「快斗、ガニマール警部もいるんだよお。」

「こっちはキッド＋ルパン。最強だぜ!」

「警察も楽しめるんでしょ? 仕事休んできたかいがあるわ!」

「っていうか、みんなで休んだっすけど。」

「気にしない気にしない!」

おわかりだろうか？

集まったメンバーはズバリ・・・ 新一、優作、有希子、蘭、小五郎、英理、園子、次郎吉、志保、博士、平次、和葉、平蔵、銀司郎、静華、快斗、盗一、千影、青子、探、佐藤刑事、高木刑事、目暮警部、白鳥警部、千葉刑事、中森警部、トメさん、由美さん、歩美、元太、光彦、小林先生・・・。

このほかにもまだ合流するらしい。

「コクーンはこちらです。」

「さあ、行くわよ!」

「おー!」

こうして、いつものメンバーはコクーンの中に入った。

「怪盗対探偵？　笑わせんな。奴らの敵は俺らさ。」

謎の影がせせら笑った。

コクーンのエントランス

「なんか懐かしい。」

蘭の言葉通りだった。

他のゲームへの入り口もあり、何人かはそっちに興味を示していた。

「工藤新一君？」

「ん？ 君は・・・ノアズアーク、ヒロキ君かい？」

「そうだよ。」

「見違えたよ。あのときはまだ10歳くらいだっただろ？」

「君も同じくらいだったね。僕は1年に5年分成長するんだ。今は15歳くらいかな？」

「にしては大人びとるなあ。工藤、こいつ誰や？」

「サワダヒロキ君だよ。マサチューセッツの大学院生。10歳でね。」

「そら、大人びとるわけやなあ、ははは。」

「もっとも本当のヒロキは僕を完成させたあと、自殺してしまったんだけど。好きに呼んでくれていいよ。」

「じゃあ好きに呼ぶぜ！俺は黒羽快斗。高3ね。」

「知ってます。怪盗キッド2世さん。」

「ああ、俺は浪速の高校生探偵、服部平次や。こっちは幼馴染の遠山和葉。あれが親父で大阪府警本部長の服部平蔵。そのそばにいるあの元気なおばはんがオカンで服部静華。」

「幼馴染じゃなくて彼女でしょ。ああ、あたしは鈴木園子。蘭の親友なの。彼もいるんだけど少し遅れてくるの。」

「えーと、京極真さんですっけ？」

「そうそう。って何で知ってるの？」

「皆さんのデータをコクーンが読み取るので。」

「早くいかないか？俺めちゃくちゃ行きたいんだけど。」

快斗が手をひらひらさせた。

「じゃ、行きましょー！」

さすが小学校教師。小林先生の声にみんな従った。

「さあ、みんな入って行って。オールタイムロンドンの始まりさ。」

L

JTR ???

「ここが19世紀のロンドンだよ。どう？」

「あのと一緒。寒くてじめじめしてる。」

「ほんまやねえ。寒いなあ。」

「青子、もう一枚来てくればよかったかも。」

「どこかで買えばいいんじゃない？」

「そうだね。」

あのと一緒と同じく、霧が立ち込め、暗くじめじめしていた。

「僕たちはベイカー街にいきませんか？」

「今回はホームズいるよな？」

「ええ。」

「よかったなあ白馬。ホームズ・・・ホームズ!？」

「黒羽君たちはそのうち迎えが来るから。」

「キャーーーーー！」

「なんだ？ 今の悲鳴。」

「まただ！ まただぞ！」

「また殺しか？ 今度は誰だ！？」

「女だ。まだ若い。おいっ、しっかりしろ！」

「誰かぁ！ 警察を！」

「何？ 今の悲鳴？ 事件？」

園子が気味悪そうに肩をすくめた。

蘭と少年探偵団、新一と志保は顔を見合わせた。

「まさか、ジャック・ザ・リッパー！？」

「そんなはずはない！ 今回は事件は起こらないようにプログラム

してあるのに！」

「高木君。今すぐ行くわよ！」

「へえ。」

「佐藤さん、ここは……。」

「管轄なんて関係ないでしょ!？」

「まあ、ここはイギリスだし、ゲームですけど。」

「とにかく行くわよ！」

「ちょ、佐藤君！ やれやれ、正義感と仕事への熱中度はピカ１なんだから……。」

「警察です。どうかしましたか？」

佐藤刑事は警察手帳を見せた。（向こうはかなりけげんな顔をした。）

「ああ・・・この人が何者かに・・・。」

「俺たちはその事務所で残業をしてたんだ。やっと終わって帰ろうとしたら・・・。この人が襲われていたんだ。」

「ああ、なんというひどいことだ。おお、神よ。」

「はあ・・・なんたることだ。」

「落ち着いてください。落ち着いて。」

「詳しいことを聞きたいので、署・・・ここどこですかね？ 管轄。佐藤さん？」

「・・・。」

「こら見事な切り口やなあ。なあ親父。」

「ああ。見事や。でも切り口が日本刀やない。やっぱりイギリスやな。」

「服部君。見てください、この切り方。本当に切りかかったただけですね。」

「ちょっとまった！」

小五郎が叫んだ。

「英理。救急車！　蘭。警察！」

「つてどこに連絡するのよ！」

「まだ生きてる！　生きてるぞ！」

「警察です！　あなたがたは？」

「日本の警視庁捜査一課、目暮です。女性が襲われたようで、偶然近くにいたので捜査に協力いたします。」

「日本？　それはそれは、わざわざ遠い所から……。」

「この近くに病院は？　この人はまだ生きています。」

「早く！」

「そうよ早くして!」

志保が叫んだ。

「手遅れになってしまっわ!」

「とにかく、お願いします。」

佐藤刑事の真剣な顔に、警察官は息をのんだ。

「今、馬車を手配してあります。ここから少し離れたところにしつかりした病院があるんです。それともうすぐレストレード警部が・・。」

「レストレード警部!?!」

「ええ、レストレード警部です。あっ来ました! レストレード警部!」

「ああ・・・また殺しか?」

「いや、生きています。」

「また? 何度も起こってるんですか?」

「・・・この方は?」

「日本の警察の方です。えーと、佐藤さんでしたっけ？」

「ええ。レストレード警部・・・聞いたことがあります。スコットランドヤードの警部さんですね。」

「はい。」

ガタガタガタガタ・・・

「馬車だ！」

「やっと来たなあ。ちよつと遅かったんやとちゃうか？」

医者が降りてきた。小五郎と英理が場所を譲り、志保が簡単に状況を説明した。

専門用語が多く、少年探偵団のメンバーは難しそうな顔をしている。

「・・・大丈夫です。応急処置がとてよかったからです。レストレード警部、すばらしいです。」

「いやいや、わたしはついさつき着いたばかりで。礼はあの日本の方々に。ええと名前は・・・毛利小五郎さんと、奥様の毛利・・・」

「妃英理です。あの方の容体は？」

「大丈夫です。あなた方のおかげです。」

「よかったわ。」

「レストレード警部？　いったいなにが起こっているのだね。ジャック・ザ・リッパーはもういないと聞いたが。」

目暮警部が、固まってひそひそ話しているイギリスの警察官たちに声をかけた。

「我々も、ジャック・ザ・リッパーはとくに死んだと思っていたんですが・・・彼によく似た男が無差別殺人を起こすようになって・・・噂じゃあモリアーティ教授が関わっているそうですよ。」

「モリアーティ教授が！？」

「ええ・・・。こんな話はこんなところでできません。日本の警察の皆さん・・・我々の所へ・・・スコットランドヤードに来ませんか？　手を貸していただきたいのです。」

「お願いします。日本は平和な国だと聞きました。ここは日本とは違います。暗くてじめじめしたロンドン。凶悪犯罪も増えているんです。ホームズさんも忙しくて・・・おまけにルパンから予告状。フランスから応援が来たって足りやしません。」

「協力していただきたいのです。せつかくのロンドン見物を邪魔してしまいますが。」

「ええ、まあ、あはははは・・・佐藤さ・・・。」

「ぜひ！ 協力します！」

警察メンバーは一旦スコットランドヤードに行くことになった。

レストレード警部は昼ごろベイカー街に行くことになっているので、そこで合流することになった。

中森警部も、着いていくことになった。

僕らのヒーロー

「なあノアズアーク・・・ヒロキ君？ あのだ・・・。」

「何だい？ 黒羽君。」

「そりゃホームズにも会いたいけどさ・・・俺、か・い・と・うな
んだけど。」

「ああ、そうだね。」

「ああじゃなくて、俺怪盗なの。探偵には会いたくないの！」

「まあ落ち着いて・・・ああ、来た。」

向こうから馬車がきた。

ただの辻馬車である。

なかの男が顔を出し、御者になにか言った。御者が馬車をとめ、扉をあける。

男はゆっくり出てきた。さらりとコートを羽織っていた。

「君が黒羽快斗君？ で、あなたが黒羽盗一さん？ お隣が奥様の千影さん？」

「はい・・・ってまさか・・・。」

「ええ。アルセーヌ・ルパンです。」

男はほほ笑んだ。

「まじで!？」

「こいつが・・・ルパン!？」

「ほんまか？」

「ほんまやろ・・・。」

「またどこかでお会いしましょう。」

ルパンはそう新一たちに言うと、黒羽一家を連れて馬車に乗ろうとした。

「ツちよい待ち!」

「大丈夫ですよ。黒羽君。携帯電話やなにかを使えるようにしてあげます。」

「なーるほど。」

「ここがベイカー街か・・・。」

「ちょい緊張するな。」

「ええ。あの有名なベイカー街ですから。」

朝早くと言っただけあって、まだ暗く寒い。

「221B・・・もうすこし先だ。」

「ここは・・・ちやうか・・・。」

「なんかすごいな。めっちゃすごいやん。」

「本当だよな。ゼーんぶ本物。」

「前よりもなんか楽しめてるってかんじだなあ。」

「そっか、蘭は前も来たんだ。」

「園子のおかげだね。ふふふ。」

「まあ、今回はジャ・・・キャツ！」

「え？　ちょ・・・や・・・ああ！」

志保の横をすり抜け、園子になにかがぶつかった。

「何？　だれあんた？」

「すみません。じゃ。」

「はあ？　ちよつとそこのガキ！　なによその態度！」

薄汚れた服を着た少年が、古い帽子をかぶりなおしながら園子をにらんだ。

「す・い・ま・せ・ん！」

「はあ？」

「急いでんだよ！　ホームズさんに・・・。」

「ホームズ？」

「ちょうどええわ。あたしら、221B探してるんだけど・・・。」

「工藤に白馬あ！ あんたらシャーロキアンやないんか！」

「もうちょつとあつちなんだって。早くしろよ。」

「けど・・・。」

「ツレがあんななんや。連れてってくれへん？」

「いいけど。じゃあ急いでよ。」

「いいわ。」

少年はすたすた歩き出した。

「僕はピーター・カッシング。父ちゃんと母ちゃんは死んじまって、ビンボーなおじさんとおばさんと暮らしてるんだけど、貧乏だから・・・。ホームズさんに小遣いをもらう代わりにいろいろ情報を仕入れてくるんだ。」

「じゃあ、もしかして、ベイカーストリートイレギュラーズ？」

「うん。まあそうだよ。」

「じゃあ僕たちの先輩ですね！ 僕たちも少年探偵団で、新一さんや志保さんに協力したり、自分たちで事件を解いたりしてるんです。」

「

「この間は大活躍だったんだぜ！」

「コナン君や哀ちゃんがいればもっと活躍できるんだけど。」

「まあまあ。ここには仲間もいるみたいで楽しいじゃないか。」

「ワ、ワトスンさん？」

「いやいや、わしは阿笠じゃ。」

「ここがホームズさん・・・あれ？ おじさん誰？」

「ああ失礼。わたしはエラリー・クイーン。アメリカの探偵だ。ホームズさんに呼ばれてね。」

「ほんまか？ 俺は服部平次や。あんたのファンやで！」

「そうかい？ ありがとう。」

「ふーん。じゃ、ちょっとどいてよ。急いでるんだ。」

ピーターは扉をたたいた。

「はい。」

「げ。」

「あらやだ。ちょっと何の用？」

「ホームズさんに用があるんだ。」

「そういえば……この間はおつかれさま。ペーター……だったかしら？」

「ピーターです。じゃ、おじゃまします。」

「でもその前に、服を払って、シャツもきちんとしまいなさい。みっともないわ。それから帽子も……。」

「へいへい。」

「おはようございます。わたしはアメリカのエラリー・クイーンといます。ホームズさんは？」

「聞いてます。2階へどうぞ。あら、あなたたち、ひさしぶりね。」

「どーも。」

新一たちは無事ホームズの前にたどりつけそうだ。

「ホームズさん？　また人が殺された！　2件だよ！　一人は死んでないけどもう一人は死んじゃった。あとお客さん。」

「そうか・・・まあお手柄だ。約束の小遣いだ。」

「ありがとう！！」

ピーターが荒っぽく出てきた。新一たちにちよつと会釈して飛び出していった。

「さあ、行こう。」

ノアズアークの声が響いた。

僕らのヒーロー（後書き）

ピーター・カッシング（1913 - 1994）は実際に俳優としてホームズを演じています。ピーター少年はそこからとらせていたたぎりました。

コ・イ・ヌール

快斗たちは馬車を降りた。

少し明るくなつてはいたが、まだまだ暗くじめじめしている。霧の街にふさわしい朝だった。

少し歩いたところに、古いボロボロの倉庫があった。

「あのールパンさん？　ここは……。」

「わたしのイギリスのアジト。君たちのものも、ノアズアークという少年から受け取ったよ。」

「へえー。」

「今回の獲物は？」

「さすが初代怪盗キッドですね。ここでは話せません。中でゆっくり……。」

ホームズとワトソンは、部屋のソファにゆったり座っていた。

新一たちはおもわずあたりを見渡してしまう。

あこがれのホームズの下宿だ。

ホームズもワトソンも想像通り。心なしかホームズは優作に、ワトソンは痩せて若い阿笠博士に似ていた。

新一たちは、これまでのことや（組織のことを含めて）なにかを話した。

「なるほど……。」

「ホームズはん、ロンドンで何かあったんか？」

ついに平次がホームズに訪ねた。

「ホームズ……話さないか。」

「もちろんだ。数日前、こんな光栄な手紙をいただいた。」

一枚の手紙を渡された。

拝啓

いつもお噂は聞いております。すばらしい御活躍だそうですね。

今回はホームズ様とワトスン様に頼みたい事があるので。

先日、かの有名なアルセーヌ・ルパン殿から予告状をいただきました。インドで手に入れたダイヤモンド、コ・イ・ヌールを狙っているらしいです。

ルパンは盗みの天才と聞いておりますし、彼には今回、すばらしいパートナーがいらつやるそうですし、彼自身もすばらしい探偵の皆さんとの対決をたのしみに行いたいとのこと。ぜひ、手をお貸しいただけないでしょうか。もし手をお貸しくださるのなら、いつでも都合のよい日に、宮殿にいらしてくださいな。夫と共によろこんでお迎えいたします。

お返事、お待ちしております。

敬具

英国女王 ビクトリア

王配 アルバート

シャーロック・ホームズ様

ジョン・H・ワトスン様

「コ・イ・ヌール？ なんやそれ。工藤、聞いたことあるかー？」

「いや・・・聞いたことないな。白馬は？」

「聞いたことがあります。確か、インド原産のダイヤモンドで、ビクトリア女王がインド皇帝になった時に手に入れたそうですよ。現在はロンドン塔にあります。イギリスに留学しているときに見ました。」

「ふーん。きれいなもの？」

「それはきれいなダイヤモンドですよ。」

「キッドが狙いそうね。」

「でも、黒羽君は狙わないといっていましたよ。現役時代に。あまりに恐れ多い、とね。」

「というわけなんだ。」

「つてことは工藤とか白馬とか服部＋エラリー・クイーン＋ホームズにおっかけられながらイギリス女王の宝石を盗むってこと？」

「そつごふじや。」

「ひゃっ、おつそろじー。」

コ・イ・ヌール（後書き）

私事で大変申し訳ないのですが・・・。

これでも受験生なので・・・そろそろ勉強に専念しなければなら
ないのです。

数学の成績を頑張つてあげて、志望校に合格した暁には、携帯を手
に入れてジャンジャン更新させていただきます！

こんなダメ文を読んでくださる皆様には大変申し訳ないのですが、
ますます投稿が不定期になりそうです。他の作品も同様です。です
がヒマがあれば投稿していきます。

これからもしひ読んでください。

バッキングガムに

「ここが・・・バッキングガム宮殿？」

「ええ。ここですよ。」

朝食を食べ、（ハドスン夫人のお手製のイギリスの家庭料理だった。）ホームズと合流した新一たちはバッキングガム宮殿にたどりついた。

「おい工藤。あれ・・・。」

平次が衛兵から目を移し、門に近づいてきた一行に目を向けた。

「警察御一行やないか!？」

「本当ですねえ。」

エラリー・クイーンも目を向けた。

「あれはレストレード警部では？ ホームズさん。」

「ええ。」

かなりの人数になった。一行は寺井に心なしか雰囲気似ている執事風の男に案内された。

「こちらでございます。」

「なんやこの部屋！ めっちゃすごいで！」

「本当だ！ すごい！」

「さすが、女王の宮殿ね。」

「さあさあ皆さまお静かに。ビクトリア女王陛下とアルバート王配殿下はもうあと数分で御到着されます。その・・・メイド！ なにボヤボヤしておる！ 早く皆様にお茶とマフィンを用意しなさい！」

「はっ、はい！」

「まったく・・・さあさ皆さま、御掛けになって。」

「だがどうでもよかった。バッキングラムにいられるだけで満足してしまっう。」

「失礼いたします。」

黒ぶちの眼鏡がよく似合う男が入ってきた。

「女王陛下の支度に少々手まどいまして・・・すこし予定より遅れてしまいそうなのです。」

「なんたること・・・。」

執事は頭を抱えた。

「予定がくるってしまつ。」

「こまりますなあ。時間も守れないとは……。」

もう一人男が入ってきた。

「聞くところによりますと、新しい衣裳係が使えない、とか。」

「そんなはずありません。彼女は才気にあふれ、女王陛下への信頼も厚い。」

「そちらではありません。そのカノジヨが病気で休みとか。代わりに来た女がどうも使えない。あなたの推薦と聞きましたが、あまりよい推薦ではなかったようですね。」

「まあまあ二人とも。ビクトリア女王も一人の女性。おしゃれをしたいのでしょう。」

「失礼します。」

さっきのメイドが戻ってきた。

「紅茶をもってまいりました。けれど珍しいですね。いつもなら王配殿下がたしなめられますのに。」

「黙れメイドの分際で！」

最後に入ってきた男が叫んだ。

「す、すみません！」

「無礼な。そんな軽口をたたく暇があるのなら早く紅茶を用意しろ！」

「はい！」

メイドがお茶を注ぎ、運んできた。ひとつひとつの動きがぎこちなく、あぶなっかしい。

執事は手帳と時計を見て頭を抱えた。

黒ぶち眼鏡も手帳を開いており、執事と話している。おそらく、今後の予定について話し合っているのだろう。

最後の男は腕を組み、薄笑いを浮かべている。

「ホームズ。宮殿でなにかあったのだろうか？ 雰囲気が悪い。」

「まあまあワトスンくん。落ち着きたまえ。そんな心配をするくらいなら、早く取材をしたらどうだ？ 君の文章がさらに正確になる。」

「ホームズ……。」

「スコーンでございます。」

「おお、めっちゃうまそうやん!」

「ほんまや。ああ、おーきに。」

さっきのメイドがスコーンを並べた。和葉をはじめとする女子メンバーは大喜びだ。

「ほんま、ええ焼き具合や。どなたがつくらはったん?」

「さあ・・・料理長が作っておくように、と。誰が作ったかは知りません。」

「そうなん? ええ腕やで。いつかええ料理人にならるやろ。」

静華もすっかりほめたたえている。

「そのメイド!」

最後の男がどなった。

「なぜスコーンなのだ? マフィンではないのか?」

「申し訳ありません!・・・けれど、厨房にもマフィンはありませんでしたよ。」

「マフィンがなかった? そんなはずはないだろう。女王陛下はよくマフィンを出される。」

黒ぶち眼鏡の男がメイドにつめよった。

「さあ？ マフィンが全部だめになったと聞きました。けれどスコーンがありましたので……。」

「なんたること……すぐにマフィンを作らせるように！」

「そんな、いいですよ。このスコーンもおいしそうですし、よろこんで食べさせてもらいますけど。」

蘭が執事に話しかけた。みんなもうなずいた。

「ここに黒羽がいたら……。」

「ぜったい真っ先に食べていますね。」

「そうなんですか？」

ノアズ・アークが驚いた表情をした。

「ほんまやで。」

だが誰もスコーンを食べれなかった。

メイドが叫んだからである。

「女王陛下！」

あわてて頭を下げる家臣や召使いたちにつられて、新一たちも立ちあがった。

「皆さんもつと樂に……ええありがとうございます。」

ビクトリア女王だった。

バッキングに（後書き）

受験生がなにやってんじゃー！

つついパソコンに手が伸びちゃいました（笑

女王夫妻の依頼

ビクトリア女王とアルバート王配は静かに座った。

「待たせてしまつてごめんなさいね。」

「本当に私の不手際で・・・申し訳ございません！」

突然、ビクトリア女王のすぐわきにいた女が叫んだ。

「いいのよ。あなたは今日来ただけですもの。無理ないわ。でも本当に驚いたわ。シヨールの巻き方や重ね方をほんのちよつと工夫するだけでこんなにいろいろなおしゃれができるなんて。いいセンスよ。」

「確かにそうだ。女王だからこそ贅沢をしてはいけないといつもうるさくしてしまつてね。ビクトリアも一人の女性だ。おしゃれくらいさせたかったのだが・・・こんな簡単に工夫できるとは思っていなかった。」

アルバートもほほ笑んだ。

「女王陛下、お時間が・・・。」

「そうね、じゃあ本題に入りましょう。」

女王は手をたたいた。

「持ってきてちょうだい！」

小姓がきれいな箱を持ってきた。宝石やレリーフで飾られていたが、ゴテゴテ飾り立てられているわけでもない。しかし美しかった。

「ありがとうございます・・・これが私がインド女帝になったときにいただいた、コ・イ・ヌールですわ。」

ビクトリア女王の手の中の箱の中を、皆伸びあがって見つめた。

「ほんまや。」

「めっちゃきれいやわ！」

「ほんとだねえ。」

「失礼します。」

突然、男が入ってきた。警備の者らしい。

「次郎吉おじさま！」

園子が叫んだ。

「仕事で遅くなってもうたんじゃが。女王陛下、お会いできて光栄です。」

「こちらこそ。では、話を戻します。これをあのアルセーヌ・ルパンが狙っているとのこと。明後日の真夜中に、ここバッキンガム宮殿の私たちの謁見室に来てくださるそうですよ。」

「間違いありませんね。」

「ええ、ホームズさん。朝、この置き手紙が私の枕元に置かれてありましたから。そんなことができるのは、あのルパンしかいらつしやらないでしょう?」

「では女王陛下……ここは……。」

「我がフランスの精鋭たちと……。」

「我ら日本の警察のコンビで……。」

「「すばらしい厳戒態勢で臨みましょう!」「」

ガニマール警部と中森警部が女王夫妻に詰め寄った。

息びつたりである。

「具体的にどのような警備を?」

「そりゃ・・・アルバート殿下。今すぐ宝石を分厚いガラスで覆って、警備隊でぐるりと。」

「もちろんルパンやキッドじゃないことは・・・。」

ギギーっと引つ張られたのは小五郎の顔。

「いてえ！」

「こんな風に確認した警備員たちです。」

「しかし・・・謁見室は日に何度も使う大切な場所。警備を厳しくするのは・・・。」

「ええ。謁見室はわたしたちにとって重要な政治の場。」

女王夫妻の言葉ももつともだった。

「では、頭脳戦で。どうでしょう？」

探だった。

「ここには探偵も警察もたくさんいるのですから、うまく罠にひっかかれば・・・。」

「それはいい考えですわ。皆さんは・・・あらあら、皆さん紅茶やスコーンを召し上がってくださいな。せっかくのものですもの。」

ビクトリア女王は新一天ちにお茶を勧めた。

「イギリスのアフタヌンティーはなかなかよ。」

「そういえば、誰も食べてないね。おいしそう！ 青子食べよう！」

女王夫妻の依頼（後書き）

無事高校合格して、今は立派な高校生です。

更新遅れてすみません。

毒入りマフィンとドジなメイド

ビクトリア女王とアルバート王配は静かに座った。

「待たせてしまつてごめんなさいね。」

「本当に私の不手際で・・・申し訳ございません！」

突然、ビクトリア女王のすぐわきにいた女が叫んだ。

「いいのよ。あなたは今日来たばかりですもの。無理ないわ。でも本当に驚いたわ。シヨールの巻き方や重ね方をほんのちよつと工夫するだけでこんなにいろいろなおしゃれができるなんて。いいセンスよ。」

「確かにそうだ。女王だからこそ贅沢をしてはいけないといつもうるさくしてしまつてね。ビクトリアも一人の女性だ。おしゃれくらいさせたかったのだが・・・こんな簡単に工夫できるとは思っていなかった。」

アルバートもほほ笑んだ。

「女王陛下、お時間が・・・。」

「そうね、じゃあ本題に入りましょう。」

女王は手をたたいた。

「持ってきてちょうだい！」

小姓がきれいな箱を持ってきた。宝石やレリーフで飾られていたが、ゴテゴテ飾り立てられているわけでもない。しかし美しかった。

「ありがとうございます・・・これが私がインド女帝になったときにいただいた、コ・イ・ヌールですわ。」

ビクトリア女王の手の中の箱の中を、皆伸びあがって見つめた。

「ほんまや。」

「めっちゃきれいやわ！」

「ほんとだねえ。」

「失礼します。」

突然、男が入ってきた。警備の者らしい。

「次郎吉おじさま！」

園子が叫んだ。

「仕事で遅くなってもうたんじゃが。女王陛下、お会いできて光栄です。」

「こちらこそ。では、話を戻します。これをあのアルセーヌ・ルパンが狙っているとのこと。明後日の真夜中に、ここバッキンガム宮殿の私たちの謁見室に来てくださるそうですよ。」

「間違いありませんね。」

「ええ、ホームズさん。朝、この置き手紙が私の枕元に置かれてありましたから。そんなことができるのは、あのルパンしかいらつしやらないでしょう?」

「では女王陛下……ここは……。」

「我がフランスの精鋭たちと……。」

「我ら日本の警察のコンビで……。」

「「すばらしい厳戒態勢で臨みましょう!」「」

ガニマール警部と中森警部が女王夫妻に詰め寄った。

息びつたりである。

「具体的にどのような警備を?」

「そりゃ・・・アルバート殿下。今すぐ宝石を分厚いガラスで覆って、警備隊でぐるりと。」

「もちろんルパンやキッドじゃないことは・・・。」

ギギーっと引つ張られたのは小五郎の顔。

「いてえ！」

「こんな風に確認した警備員たちです。」

「しかし・・・謁見室は日に何度も使う大切な場所。警備を厳しくするのは・・・。」

「ええ。謁見室はわたしたちにとって重要な政治の場。」

女王夫妻の言葉ももつともだった。

「では、頭脳戦で。どうでしょう？」

探だった。

「ここには探偵も警察もたくさんいるのですから、うまく罠にひっかかれば・・・。」

「それはいい考えですわ。皆さんは・・・あらあら、皆さん紅茶やスコーンを召し上がってくださいな。せっかくのものですもの。」

ビクトリア女王は新一たちにお茶を勧めた。

「イギリスのアフタヌンティーはなかなかよ。」

「そういえば、誰も食べてないね。おいしそう！ 青子食べよう！」

「きゃ！ あっ！」

突然、あのメイドが悲鳴を上げた。見ると今にも水差しが・・・。

「「あぶない！」」

高木刑事と佐藤刑事の相変わらずのナイスコンビぶり。

「あいかわらずね。」

と、由美。冷やかしを忘れない。

ガッシャーン！

水差しは無残にも粉々に割れてしまった。

「す、すみません！　すぐに片付けます！」

「まったくなんてことをしてくれるんだ！」

「今回のメイドも使えませんかえ・・・執事殿。」

「う、ごめんなさい！」

メイドはあわてて割れたガラスを拾い集めていた。

「いいのよ。皆さん、さあお食べになつて。」

「ビクトリア、君の分だ。」

「ありがとう。さっそくいただくわ。」

シュパン！

「キャツ！　なんです！？」

「食べるな！」

「この声は・・・まさか・・・！？」

平次のつぶやきもアルバート王配の叫びに消えた。

「無礼者！ おまえは！？」

「青子ー！ 食べるなあー！」

「ふえっ？ かい・・・。」

「食べるなー！」

「快斗！？」

ドカーン！

青子の手から豪快にスコーンをはたき落したのは、快斗だった。またメイドに化けていたのだ。

おもわず新一が一言。

「おめー女装好きだな。」

だが青子はもちろん、「冗談を口にする新一もまったく何もわからない。

「???」

「スコーンを食べるな！ それは毒入りだ！ 水をふくふりをして

調べたんだ。間違いない、女王陛下の命を狙っている奴らがいる！」

「く、黒羽あ！？」

「間違いない。偵察中に妙な噂をたくさん聞いた。間違いないんだ。そうだろ？ 親父。」

「黒羽君、親父さんもいるんですね？」

「あつ、やべえ……。」

快斗は変装を解きながら叫んだ。

「とにかく休戦！」

宮廷の陰謀

男たちが変装を解いた。ルパンと盗一、寺井の3人と、

女。快斗の母、千影だ。（あの代理の衣裳係）

「俺たち、どんな対策が立てられるのか調べてたんだ・・・ほら、今回はいつものメンバー＋ホームズさんたちだし・・・まあこつちにはアルセーヌ・ルパンがいるけどなっ」

快斗が言いわけをした。

「たぶん女王陛下と直々会うと思って、それなりに身分の高い役人に化けようとしてさ。親父たちと宮殿に入っとうまくターゲット見つけたらさ・・・。」

快斗たちの話はこうだ。

「ルパンさん、ここらへんじゃないですか？・・・ちょっと待って。センサーとか・・・ないか。」

「大丈夫そうだな・・・よし、行こう。」

そのとき、ボソボソ声がした。

「・・・頼むな。」

「ええ、なるべく悟られないように頑張ってみます。」

「よく言った。もう一度確認だ。例の日、誰か客が来るらしい。」

「それって、ホームズとか工藤とかのこと？」

「シーツ！」

「快斗、何かあるようだ。静かに聞こう。」

「誰かは知らんが、噂じゃルパン絡みだそうだ。ちょうどいい。うまくいけばルパンのせいにはできる。」

「はい。女王陛下は御自分で作られたマフィンを出したがる。けれど・・・。」

「おまえがその作ってあったマフィンをダメにして、料理長に代わりの・・・スコーンか何かを頼む。」

「で、わたしが料理長の信頼の厚い、あの若いコックに毒を渡す。」

そうとは知らせないで。」

「女王の秘伝のレシピだと言ってな。」

「かわいそうなコック。信頼も厚いのに。やはり、別の人間にしたほうがいいのでは？」

「構わない。そうそう、ほかのデザートもダメにしとくのを忘れずに。これで客もろともお陀仏だ。」

「わかりました・・・そろそろ時間です。失礼します。」

「失敗するな。危ないと思ったら手を引け。」

「ええ。では・・・。」

「何を話していたのですか？ 物騒な単語を耳にしましたが？」

男がもうひとり来た。

「なんでもない。怠けている召使いがいてな。ちょっと喝を入れていた。」

「それはごもつとも。しかし、このような場所に、あなたほどの方がいるのは少しおかしいのでは？」

「少し回り道をしてしまったな。お前こそなぜここに？」

「あなたと同じですよ。この宮殿は少々複雑だ。」

「それよりも、新しく女王の元におくメイドの代理のこと、聞きましたか？」

「ええ。彼女はセンスがいいですから。身元もしっかりしています。」

「そういえば、あなたが独断で選んだと。彼女、本当に大丈夫なんですか？ 暗殺やらなんとか、よく聞く物騒な雰囲気ですからねえ。つい疑ってしまうんですよ。」

「それはこちらと同じですよ。宮殿に物騒な言葉が飛び交っていると、ついつい怪しんでしまつて。」

「ならば不審者を入れないのが、得策では？」

「彼女は安心できる女性だ。才能もある。」

「まあまあ。神経をすり減らすのは無駄なこと。ではお氣をつけて。」

「そうだな。」

2人は別れたが、最初の男はさつき話した男の後を追い始めた。また話し合つつもりなのである。

最後に来た男も、不審に思ったのか、男の後をつけ始めた。

「しつれいしまーす・・・。」

快斗はそう囁くと、3人まとめて睡眠薬で寝かせてしまった。

「人目のつかない場所に運ぼう。」

「こっちだ快斗。秘密の通路がある。」

「了解。なんかヤバい会話だったな。」

「よそ者に敏感なようだ。気をつけないとな。」

「ぼつちやま、ここは寺井にお任せください。何か嫌な予感が・・・。」

「まったくいつもいってもヤバいときには・・・寺井ちゃんとはともかく、母さんなんかヘマしそう・・・。」

「大丈夫だ。あいつはああ見えて怪盗淑女^{ファントムレディ}なんだからな。」

「元だけだな。よしこれで全部だ。まずは身元調査つと。」

「ケネス・マカルピン。貴族だ。身分も高いが、噂じゃ女王と仲が悪いそうだ。なんでも身分に関係ない政策をつぎつぎと考え出しているのが理解できないらしい。こいつはオーウェン・グウィネス。女王に絶対の忠誠を誓っていて、ちょっとしたことでも女王を恨むマカルピンを嫌っている。ただ、マカルピンは大物だ。楯ついたせいで立場も危うくなっているそうだ。彼に近づくのは簡単だったよ。もう味方もあまりいない。アルフレッド・ウェセックス。もとは由

緒正しい家の出身なんだが、かわいそうにな。その家はすっかり衰えちまったらしい。生き残るためには、下働きみたいなことから始めることしかなかったそうだ。かわいそうに、その家がなぜ衰えてしまったのかもまだ知らないらしい。」

「どういうことですか？」

「ウエセツクス家が衰えた理由？ マカルピンが手を出したからだよ。実際には奴の親父さんかな？　かわいそうに、ウエセツクス家は主人夫妻をなくし、たった一人の息子はまだ小さい。マカルピン・・ケネスのほうはまだ若かったがな。本当はその一人息子・・アルフレッドを殺してもしたかったんだろう。だが王家の血をひく由緒正しい大貴族様の御子息を殺すわけにはいかない。そこでかわいそうにとか何とか言って引き取って、こき使わせながら育ててきたってわけ。本人は親のことをあまり知らない。マカルピンに使われて、女王暗殺に加わったんだろう。」

「女王暗殺？」

「やけに詳しいですね、ルパンさん。」

「前々から潜入して、少しずつ情報を集めていたんです。」

「いつらどうする？」

「確かに、下手に隠せば・・。」

「いい場所を知っています。では計画通り。」

「で、変装して工藤たちを探ってたんだけど、スコーンが出てきてさ。一肌脱いだってわけ？」

「ってことはや、黒羽。誰かが女王陛下の命をねらっとるっちゅうことかな？」

「ああ。たぶん今回の盗みの混乱のついでにだ。」

「ならば・・・盗一さん、快斗君、千影さん。それにルパンさんも、今回のコ・イ・ヌールはあきらめてもらえませんか？」

「いえ、目暮警部。それはいけません。それを逆手に取られるばかりか、我々が感づいたと知り、ますます巧妙な手口を使うようになってしまいかねません。」

「しかしじゃが、優作君。女王陛下のお命を守らなければ。」

「そうよ、優ちゃん。いくらゲームの世界でも人の命は守らないと。」

「そうや。たぶんアルバートはんも狙われてはるっちゅうことやな。」

「ええ、そうね。警察としては見過ごせないわ。高木君、本庁に連絡・・・ごめんなさいね。」

「ああ、はい、いやその……。僕も佐藤さんに同感です。」

「平次、何とかせな。」

「ああ、ごちゃごちゃ言うな。優作はんの言うてはることも正しいんや。どっちにしたらええんや。工藤！」

「俺も分からねえ。どっちが正しいんだ？」

「もう男なんかええわ。あたしが女王陛下を守る。」

「あたしもそうします。」

蘭と和葉が名乗りを上げた。

「でも、あなたたち、レディじゃない。」

ビクトリア女王がそれを止めた。

「女王様、うちらをなめたらアカンで。」

「和葉ちゃんは合気道の達人、わたしも空手を習っているんです。」

「習ってるってレベルじゃねーだろ……。っておい蘭、やめろよ。」

2人は証明しようと意気込む。

「ああっ……。」

「やめろ……。」

ガシャーン！

バーン！

壁にひびが入った。

「すごいなあ蘭ちゃん。壁にひびが入ってしもつたわ。」

「和葉ちゃんもすごいじゃない。床がボロボロ。」

「おい和葉……。」

「蘭、ここバツキングダムだぞ。」

「あら、頼もしいわね。ホームズさん、あなたの仲間の皆さまを信じさせてもらいます。もちろんこの方たち、ルパンさんもね。予告通り、たのしいショーを待ち望んでおります。」

女王の一言ですべてが決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6741o/>

ノアズアークの恩返し

2011年10月10日04時35分発行